

上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会 取組発表会を開催しました

令和8年2月14日(土)、上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会(以下、協議会という。)では、3年間の取組成果を共有する「取組発表会」を開催しました。

<参加者> 93人

- ・介護支援専門員 27人
- ・看護師、保健師 18人
- ・医師、歯科医師 10人
- ・リハビリ職 10人
- ・社会福祉士 10人
- ・その他 18人

当日は、高橋慶一協議会長の挨拶に続き、事務局から協議会全体の取組について説明した後、4つの専門部会による活動内容、成果、医療・介護連携で大切に思うことについて発表を行いました。



●登壇者

①入退院時連携推進部会

- ・和栗 健 介護支援専門員
(センター病院居宅介護支援事業所)
- ・滝沢 いつ子 看護師
(上越地域医療センター病院患者支援センター)

②急変時対応部会

- ・仲田 亜矢子 看護師
(上越あたご地域包括支援センター三和)
- ・西條 美雪 看護師
(訪問看護ステーションけいなん)

③市民啓発部会

- ・小山 志穂 社会福祉士
(しおさいの里地域包括支援センター 頸城くらし支援室)

- ・柴又 良太 薬剤師 (共創未来はまなす薬局)

④対人支援スキルアップ部会

- ・瀬下 善人 主任介護支援専門員
(悠久の里居宅介護支援事業所)
- ・川澄 幸子 精神保健福祉士
(高田西城病院 認知症疾患医療センター)

●専門部会の取組発表の要旨は次のとおりです。

【部会を通して学んだ大切なこと・感想】

<入退院時連携推進部会>

・「入院と同時に退院支援が始まる」という言葉がポイントになった。ケアマネジャーは入院で自分の手を離れたと捉えず、退院後の在宅生活を見据えて、病院と丁寧に情報共有や課題の検討をする必要がある。

・医療側と介護側で視点や役割に違いがあることを理解することが必要である。本人の状態像について、介護側は「自宅での元気な姿」が基準となるが、医療側は「入院時の体調が悪い姿」が基準となる。また、役割については、医療側は「目の前の患者の病気を治す・安定させる」、介護側は「生活を支える、本人の状況に応じてマネジメントする」という違いも確認した。

・訪問看護師は、医療と介護をつなぐ役割として、かかりつけ医との連携調整や具体的な病状説明が可能である。訪問看護も退院前カンファレンスから積極的に連携できるとよい。

<急変時対応部会>

・急変時に本人・家族をしっかり支えるためには、平時から病状や思いを共有することが大切である。支援者は、今後の見通しを相手に伝える言葉で繰り返し説明し、状況に応じた意向確認をしていく必要がある。

・急変時に備えて準備を重ねても、看取りの場面で家族は不安や後悔を抱えるものである。家族に「その選択で良かった」と支援者が伝えられる存在でありたい。そのためにも、関係職種が協力し、本人や家族を支える体制が必要である。



〈市民啓発部会〉

・「もしもの時」に、本人・家族の想いが揺らぐのは自然なことである。元気な時から繰り返し意向を確認していくことが大切である。

・連携する上で大切なことは、“感度よく”本人や家族に接し、気づいたことを“記録”して、“共有”することである。

・「終活」は一人でもできるが、「ACP(人生会議)」はみんなで行うものである。専門職が持っている情報を紡ぎ合わせることで、その人の想いが見えてくる。日頃の何気ない会話の中に、大切な意向が隠れていることを意識して、支援できるとよい。



〈対人支援スキルアップ部会〉

・本人の想いを語ってもらい、その想いに寄り添うことの大切さを学んだ。その姿勢は、医療・介護すべての職種に共通する支援の基本である。

・ケアマネジャーは、信頼関係の構築を基本とするが、相手の話を丁寧に聞く姿勢を意識している。

・支援者は、「信頼関係をつくる」「先を急がない」「しゃべりすぎない」ことが大切である。頭では分かっているとしても忙しいと崩れやすいため、繰り返し立ち返る場の必要性を感じている。

〈専門部会の発表のまとめ〉

○協議会副会長 瀬下 善人 主任介護支援専門員



・4つの部会に共通してみえたキーワード

- ①聴く…本人と家族の想いを、先を急がずに丁寧に聴く
- ②残す…聴いたことを記録にして、支援者が活用できる形にする
- ③つなぐ…記録を共有して、多職種で紡いで次の支援につなげる

・医療と介護、職種によって視点は違う。コップ半分の水を「半分もある」と見る人もいれば、「半分しかない」と見る人もいる。その違いがあるからこそ、本人の姿を多面的・立体的に捉えられる。違いを壁ではなく、本人のための「資源」として持ち寄ることが大切。これが、部会の共通メッセージである。

・私たち専門職も地域の一員であり、いずれは支援を受ける立場になる日がくる。その時に、自分の想いを尊重し、一緒に考えてくれる地域であってほしい。

・支援を受けた人が「これが私の望んだ生活だ」と実感でき、関わった人が「あの選択でよかった」と思えることが大切である。そのためには、支援する専門職が「聴く」、「残す」、「つなぐ」のキーワードを実践できるとよい。

●参加者のアンケート結果は次のとおりです。

①取組発表会の満足度

98%の人が「満足」「やや満足」と回答

理由(自由記載)

- ・職種の日々の活動からの意見を聞くことができた。
- ・4つの部会の役割、活動がよく理解できた。
- ・医療との連携が難しいと感じていたが、伝えることが大切だと理解できた。
- ・発表の中に、具体的な調査結果等のデータがあるとよい。

②連携に必要なこと ※自由記載

- ・顔の見える関係づくりや多職種連携
- ・患者の話す機会を奪わず、想いを丁寧に聞くこと。
- ・勉強会や情報共有の場をつくる。
- ・職種や視点の違いを理解する。
- ・信頼関係をつくり、つなぐ。
- ・地域連携連絡票の活用
- ・専門職、医師等の力関係がなく、フラットに関わるとよい。

③感じたこと・参考になったこと

- ・助言する前に、相手の声と言葉を聴くこと
- ・入退院で途切れない支援が大切
- ・先入観をなくし、人を見ること
- ・支援の際は、多くの職種が関わっていることを忘れないようにする。
- ・立ち止まって考えることの大切さを再確認した。
- ・本人が「これが私の望んだ生活」と実感できる支援をしていきたい。
- ・「何気ない会話の中でその人の意思を探る」という言葉が印象に残った。
- ・本人、家族の双方の落としどころを見つけ、お互いが後悔しない選択ができるように支援したい。
- ・自分ができる役割に共通することもたくさんあったので、日々の業務に活かしていきたい。

④協議会や専門部会員へ一言

- ・職種は違っても、熱い思いをもって支援していることを実感した。大きなチームの一員として、在宅医療、介護のよりよい支援を考え、活動したい。
- ・協議会の取組も9年を迎え、数々の取組やツールの作成など、連携の輪は確実に大きくなっていると思う。急がなくてはならない状況ではあるが、焦らず、くさらず、一步ずつ取り組んでほしい。
- ・「地域でこれからも生活していきたい」と思える取組を継続してもらい、ありがとうございました。
- ・3年間お疲れさまでした。よい上越地域にしたいという思いがあつてこそ、取組が進んでいると思う。
- ・とても素晴らしい取組発表だった。自身の支援を振り返り、見直す場となった。
- ・各専門職種がフラットな関係で互いに学び、真に連携を実践されていて素晴らしい。

■終わりに

土曜日の開催にもかかわらず、多くの皆さまにご参加いただき、誠にありがとうございました。アンケートでは、98%の方から満足との声をいただき、事務局としても本発表会を開催してよかったと感じております。

今後も、皆さまが在宅医療・介護連携推進協議会のチームの一員として、連携の輪を地域で広めていただけることを期待しております。引き続き、協議会へのご理解とご協力をお願いいたします。

